

なごや 市民活動通信

特別
編集号

2026年
3・4月



市民のちからで
いきいきなごや

「なごや市民活動通信」最終号に寄せて

名古屋市市民活動推進センター開所から3か月後の2012年7月に、「月刊ボラみみ」との合冊で創刊した「なごや市民活動通信」ですが、2026年3・4月号(122号)をもって、最終号となりました。最終号に寄せて、歴代の所長からメッセージをいただき、本誌に掲載しております。一部の方からは、長文のメッセージもいただきましたので、こちらで紹介させていただきます。



創刊号
(2012年7月 No.1)



最終号
(2026年3・4月 No.122)



小野田 都

(2代目:2014年4月~2017年3月)

なごや市民活動通信が最終号を迎えるとのこと、正直に言えばとても寂しいです。印刷物を削減し、SNS等で情報をお届けする…これも世の趨勢とはいえ、アナログ世代の私にとって、また一つ「古き良きもの」がなくなってしまう感じです。

思い返せば、最初に「ボラみみ」の裏側に「なごや市民活動通信」を発見した時には、両A面のレコード(これもまた今の時代には死語なのでしょうが…)のような楽しさと、市とNPOの双方がWin-Winの関係になれるしくみが素晴らしい！と感心しました。編集会議では、いかに楽しく役に立つ情報をお伝えするか、皆でアイデアを出し合い写真やイラストを駆使して4ページの誌面に盛り込みました。私の密かな楽しみは「スタッフの一言」コーナー。私の回からイラストの得意な加藤舞美さんが、素敵な似顔絵を描いてくれました。(その後もずっと続いていました。)

これまでたくさんの読者さんに、楽しんで活用していただいた情報発信ツールは、形を変えてさらに多くの皆様に届くことと期待しています。最後に、14年間発刊にかかわっていただいたすべての皆様に感謝申し上げます。



新美 君栄

(3代目:2017年4月~2019年3月)

市民活動通信…ボラみみとともに、今でも発行を楽しみにしている機関誌です。

当時は担当者が参加する編集会議に、私も一度参加したいと思いながら、結局叶わず異動してしまいました。沢山あるしみかつ時代の心残りの一つです。

そんな「ボラみみ・市民活動通信」の記事の中で一番の楽しみは、なんといってもスタッフのつぶやきコーナーです。加藤舞美さんによるスタッフの似顔絵とともに、誰がどんなことをつぶやくのか、とても楽しみにしていました。

そんな市民活動通信を大抵は役所の施設の情報コーナーで見つけてはもらってくるのですが、ある日、ご近所で頑張っておられる個人書店のレジ横に見つけた時には、本当にうれしくて、本も買わないのに「これもらっていいですか？」と店番のおじさんに声をかけたことがありました。

それ以来、その本屋さんに行く(あるかな?)と思いながらレジ横をチェックし(よしよし、あるある)と満足して帰って(もちろん本も買ってですよ~)行くのでした。

今でも私の楽しみの一つである「ボラみみ・市民活動通信」が無くなるのは本当に残念です。これまで通信に携わってきたスタッフの皆さんへの労いと感謝を込めて終わりたいと思います。

みんな、お疲れ様でした！そして、楽しい通信をありがとうございました！



織田 和隆

(5代目:2021年4月~2023年3月)

長きにわたり市民活動通信の発行にご尽力いただいた、織田さん、佐原さんを始め、ボラみみスタッフの皆様やセンターのメンバーに心より感謝申し上げます。

時の流れとは言え寂しくはありますが、また新しい形で、そしてボランティアへの情熱は変わらず未来に引き継いでいただけるものと期待しております。

さて、私がセンターに勤務させていただいた時は、通信がカラーになり、とても魅力的な冊子になった頃です。そして、コロナを乗り越え、アフターコロナに向かうべく手探りで活動を進め、オンラインにより距離を乗り越えた出会いができるようになった一方で、榮なのに皆さんと酒が飲めない寂しい時期でもありました…。コロナの流行状況次第で、ぼらマッチや各種イベントの開催方法に頭を悩ませながら、また、熱海やウクライナ(悲しくも終わりが見えませんが)もありました。

そんな時ではありましたが、情熱的な皆様に囲まれ、大変充実した日々を過ごさせていただきました。あっという間の2年間でしたが、今でも忘れることのできない素敵な時間でした。

センターから離れ、気が付くと3年になりますが、新聞その他で皆様のご活躍は目にしており、いつも勇気をもらっています。

医療の現場でも、デジタル化、AI の活用などにより、これまでは救うことのできなかつた命を救える時代になって来ております。凄まじい勢いで医療は進化を遂げております。

一方、機械にスタッフが振り回され、人が機械を使うのではなく、機械に人が使われる時代になりつつあるような気がしています。近い将来「AI の惑星」になってしまうのかも？

AI の進化は利便性・合理性の追求には寄与しますが、人の心には響きませんね。人の魂を揺さぶり、人を求め続けるボランティア・NPO の活動は、AI の時代だからこそ、より重みを増すものと信じております。

ボランティア・NPO、永遠なれ。



青木 直人

(6 代目:2023 年 4 月~2024 年 3 月)

私は、市民活動推進センター開設時のメンバーでもあり、『なごや市民活動通信』のスタート時にも関わっております。そして、その後、令和 5 年度には、所長も務めさせていただきましたので、所長としての関わりもあります。

『市民活動通信』で印象に残っていることは、名古屋市で認定をした認定 NPO 法人の代表へのインタビュー記事を掲載したことです。2013 年 8 月号に、「名古屋市認定 NPO 法人第一号！」という特集記事を掲載しました。

その代表からは、活動への思いや活動継続への意欲などをお伺いしました。それだけではなく、組織運営の苦労などもお伺いすることができました。

日々の職務の中で NPO の皆さんとやり取りすることは多いですが、このようにきちんとインタビューをさせていただくことはなかなかないので、本当に貴重な機会となりました。

また、この特集記事の表紙には、別の NPO(名古屋市で二番目に認定をした認定 NPO 法人)へ認定通知書をお渡しした写真が掲載されています。実は、こちらの認定 NPO 法人の代表にもインタビューを行っています。代表はアメリカの方で、英語でやり取りしたことを覚えています。話していただいた内容はもちろんですが、英語でのインタビュー自体も良い経験となりました。

その他にも、『市民活動通信』では、様々な協働事業で一緒に取り組んだ多くの方々に登場していただきました。

そして、時を経て、所長として市民活動推進センターに戻ってきた際には、そうした皆さんとのつながりが大きな財産になっていることを改めて認識しました。また、所長として『市民活動通信』の原稿を執筆したことは、感慨深いものがありました。

『市民活動通信』をきっかけに、NPO の皆さんと深く知り合うことができたことは、市職員としてはもちろん、私個人としても大きな糧となっています。

14 年間、『なごや市民活動通信』に関わってくださった皆さま、ありがとうございました。

